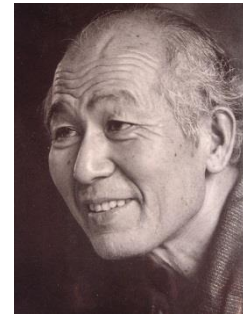

斎藤喜博（1911～1981）

わが国で初めて、知識伝達に偏った伝統的な教え込みの授業を否定し、それに替わって言葉の意味を追求し子ども自身が自分の考えを変革する知識追求方式の授業を提唱して、8回に及ぶ公開研究会などでそれを実証し、反響を呼んだ。「島小教育」として知られる。



教育実践家、教育学者。群馬県師範学校卒。島小学校長、境小学校長。（群馬県）宮城教育大学教授。

斎藤が構想する授業は「島小授業案形式」（1962年）として結実した。1時間の授業過程は連続する数個の「展開の核」から構成される。「展開の核」は子ども間に生じる対立を解決することによって新しい次元へ変革・移行を可能にする教材中の言葉（表現）である。教授学における画期的な技術的発見である。

新しい授業が要求する教育論、教師論、学校論、学級論、教材論、教材解釈論、授業論、授業研究論を展開し、多くの著作を残した。主要著作は『授業入門』『授業』『授業の展開』『教育学のすすめ』『授業と教材解釈』『授業の可能性』、『わたしの授業』5巻、『介入授業の記録』5巻である。全著作は『斎藤喜博全集』15巻、『第二期・斎藤喜博全集』12巻に収められている。このほかに写真集『未来誕生』『いのち、この美しきもの』がある。
(宮坂義彦)

新版 教育小辞典【第2版】学陽書房（2002）より
